

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

A study on psychological factors influencing attitudes towards "jiko-sekinin-ron" ("personal responsibility") (2) : Focusing on the effects of ego identity status

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 美恵, Tamura, Mie メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/718

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



イラク人質事件における「自己責任論」への態度に影響を及ぼす心理学的要因の検討（2）

——アイデンティティ・ステータスとの関連について——

田村 美 恵

はじめに

2004年4月に起きた「イラク3邦人人質事件」は、多くの人々にとって、未だ記憶に新しいものではないだろうか。バクダッド近郊で武装集団に拘束され人質となった3人は、ジャーナリストや市民運動家、ボランティアといった違いこそあれ、いずれもが何らかのかたちで平和活動や人道支援に携わっていた民間人である。政府の要請を受けて派遣された自衛隊員ではなく、武器をもたない民間人が拘束され、しかも、彼らの命と引き替えに、自衛隊撤退を要求されるという展開は、誰もが予想し得なかったものであり、日本中に衝撃を与えた。さらに、その後噴出した「自己責任論」——人質となったのは政府の避難勧告を無視して出かけた彼ら自身の責任。国が助ける必要はない——をめぐっては、マスコミや知識人、さらには一般の庶民をも巻き込んで、その是非をめぐって議論が闘わされた。

著者は、昨年、本学学生を被験者として、「自己責任論」への態度に関する調査を行ったが（田村，2004），そこで感じられたのは、彼ら被験者たちのこの問題に対する並々ならぬ関心だった。それは、調査冊子の最終ページに書き記された「イラク人質事件に対する感想」の記述量の多さや、「怒り」や「腹立たしさ」などのネガティブな感情の直截的な表明、記述全体を彩る

厳しく断罪的な論調といったものなどによって裏打ちされている。

こうした関心の高さの背景には、まず第一に、人質となったのが、被験者たちと同年代の青年たち（19～34歳）であったことが挙げられる。青年層の政治的無関心が指摘されるなかで、今回の事件は、自分たちと同年代の人々が主役となったことにより、身近な、「自分に引きつけて考えることができる問題」として感じられたのではないだろうか。以下のような記述は、このことを端的に示している。

“一番心に残ったのは、私と同年代の人がイラク（当時かなり危険であった）に援助をしに行っていたという事実であった。彼が人質となってくれたおかげと言ったら言葉は悪いが、それで私は彼のような人がいるということを知り、同年の人が危険を冒してまでも、平和のために働きかけているということに刺激された。”

第二に、これと関連して、彼ら青年たちの関心の高さのより大きな理由としては、「自己責任論」が提起するさまざまな論点——人質たちの行動／仕事をどのように評価すべきか（賞賛、あるいは、批判すべきなのか）、また、自立した人間としての個人の「責任」とは何か、一方で、国家の「責任」とは何か、そして、個人と国家／社会とはどのような関係のもとにあるべきなのかといった問題群——が、以下で述べるように、青年期を生きる若者たちにとって、自分自身の問題として考えるべき「発達課題」（Erikson, 1982／1968）、言い換えれば「アイデンティティ」の問題と重なるところが大きかったという点を挙げることができる。

本研究の目的は、前稿に引き続き、「自己責任論」に対する態度がどのような考え方に基づいて成り立っているのかについて検討することにあるが、上のような着眼点に基づき、今回は、この問題を青年期のアイデンティティとの関連で検討してみたい。

以下では、まず、青年期の「アイデンティティ」をめぐるEriksonの議論を概観し、今回の「自己責任論」が青年たちの「生」の課題とどのように関わっているのかについての見取り図を示してみたい。

青年期のアイデンティティ、発達課題と自己責任論

周知のように、Erikson (1982/1968) は、人のパーソナリティの発達における青年期の発達課題として、「アイデンティティ (の達成)」を掲げた。「アイデンティティ」を一言で定義するのはかなり難しいが、ここでは、さしあたり、次のようなものとして捉えておこう。すなわち、それは、“生ける 斉一性と連続性との主観的感覚”であり、“ものごとに積極的にしかも生き生きと対処できる自分を、きわめて深く、強く感じる” (Erikson, 1982/1968, p.9) ことができるという感覚 (a sense of identity) である。このような「アイデンティティの感覚」は、幼児期から老年期へ至る発達の各段階で経験される「危機」——以前の段階から次の段階へと移行する際の“一層傷つきやすくそれだけに潜在的能力が拡大する重要な時期” (p.119) に経験される“必要不可欠の転回点” (p.5) ——を何とか越え出ようとするなかで、意識的もしくは無意識的に享受されるものであるとされる。この意味で、「アイデンティティ」という課題は、青年期にのみ限られるものではなく、生涯を通じて存在するものと言えるのだが、しかし、にもかかわらず、これが青年期特有の課題として位置付けられるのは何故か。それは、青年期が、“一時的というよりは最終的に、しかも事実上はじめて” (Erikson, 1982/1968, p.166) 自ら「自覚的」にアイデンティティを達成しようと試みる時期だからである。

ここで重要なのは、「アイデンティティの感覚」をその基底において支えているのが、「社会的なもの」であるという点である。言い換えれば、「私が私として生き生きとした存在であるという感覚」は、「社会的な承認」を必要不可欠とするのである。ここで言う「社会的なもの」とは、幼児期におい

ては「母親」であり、また、児童期においては、「同年代の子ども」や「先生」「学校」といった具体的で身近な「他者」である。一方、青年期においては、それらは、“その輪郭が漠然としていて、要求するのものはきわめて直接的な、一つのより大きな単位、すなわち「社会」”(Erikson, 1982/1968, p.167)にとってかわる。言い換えれば、青年期のアイデンティティは、“青年個人個人が、かれにとって有意味な社会集団—階級、国家、文化などを特徴づける集合的なアイデンティティの感覚から受けとる支持に依存している”(Erikson, 1982/1968, p.110; 傍点は筆者による)のである。²⁾

ここにおいて、青年たちが直面するのは、まずもって、「それまでの自分」とその時代の社会が有する(経済的・宗教的・政治的な)価値観とが「調和」しうるような「新たな連続性感と同一性感」を探求するという課題——西平(1993)の言を借りれば、“「自分はどこに属する者なのか」という問いと結び付いた「一体自分は何者なのか」という問い”(p.211)——である。また、これと関連して、「それまでの自分」が習得してきた役割や技能を、その時代の“社会の理想像”と“いかにして結びつけるのかという問題”(Erikson, 1982/1968, p.167)(典型的には職業選択の問題)や、自らのアイデンティティを保証しうる当の「社会的なもの」について、真正面から吟味・批判するという課題(同掲書, p.167)などにも直面することになる。

これらのことに鑑みれば、「自己責任論」が提示する問題群——それらは、人質たちの行動や仕事の価値、敷衍すれば「個人の生き方」を問う問題であり、また、国家や政府、あるいはそこに生きる人々といった「社会的なるもの」をどう分析/評価するのかという問題であった——は、青年期の「危機」に立ち現れる「課題」の具体的な表現型の一つと見なせるのである。

アイデンティティ・ステイタスと自己責任論に対する態度との関連

ところで、一口に「青年期のアイデンティティ」といってもその様態にはさまざまなものが想定されうる。例えば、青年期特有の「危機」を乗り越え

るなかで、「社会」と「自分」との間の関係が（違和的よりもむしろ）「親和的」に感じられ、安定/充実したアイデンティティの感覚³⁾を確立しているような場合もあるだろう。また、未だそのような感覚が優勢となるには至っていないものの、自分が積極的に関与（自己投入）できる対象——それは“「人生にたいするコミットメント」をただちにもたらすような”ものである必要がある（Erikson, 1982/1968, p.210）——を求めて、今現在、奮闘中であるといったような場合もあるだろう。一方で、そうした「探求」がうまくいかず、次第に活力を失ったり、あるいは、「探求」それ自体を放棄したりするという、いわば「同一性拡散（役割混乱）」と称される状態に陥る場合もあり得る。

Marcia (1966) は、こうしたアイデンティティの諸相を実証的に検討するため、「アイデンティティ・ステイタス」という概念を提唱した。これは、青年期のアイデンティティを「危機」の有無——数ある選択肢の中から、自分にとって何がふさわしいか（職業や価値観等）について迷い悩んだ時期の有無と、「自己投入」の有無——積極的で主体的な関与をしているか否かという2つの変数から捉えようとするものである。Marcia (1966) は、被験者に面接を行ってこれら2変数の水準に関する情報を収集し、被験者を次の4つのステイタスに分類した（以下の説明は加藤（1983）も参照した）。

- ① 同一性達成地位 (identity achievement status) すでに危機を経たうえで、現在自己投入の対象を持っている者。自己の定義において、より混乱は少なく、不安は感じにくい。
- ② 積極的モラトリアム地位 (moratorium status)⁴⁾ 現在危機の最中にあり、明確な自己投入の対象を求めて、積極的な努力を行っている者。
- ③ 早期完了地位 (foreclosure status) 危機を経験することなしに、両親や社会通念が支持するものを自らの自己投入の対象としている者。権威主義的価値に対して従順な傾向を示しやすい。ある種の「硬さ」が特徴である。

④ 同一性拡散地位 (identity diffusion status) 過去の危機の有無にかかわらず、現在自己投入を行っていない者。特定の職業を決定もしていないし、それについて深く関心を持ったり考えたりしていない。また、イデオロギーの問題や課題にも興味をもっていない。

このようなアイデンティティの様態の違いは、自己責任論に対する態度や、そのベースとなる「個人」や「社会」に対する考え方などに影響を及ぼすことが考えられる。

例えば、「政府の勧告を無視してイラクに行った彼らを助ける必要はない」という自己責任論は、国家や政府に従わない者は「悪」であるといった考え方、敷衍すれば、個人の行動といった「私的領域」よりも国家や政府といった「公的なもの」の方が優先されるべきであるとする態度/志向性がベースとなっていると考えられる（田村，2004）が、こうした志向性が最も顕著に見出されるのは、権威主義的価値観に親和的な（e.g., Marcia, 1966, 1967; Marcia & Friedman, 1970）早期完了地位の者であると予想される。

一方、現在危機の最中において、自己投入の対象を獲得しようと奮闘している積極的モラトリアム地位の者たちは、自分が着床すべき「社会」そのものを再検討するという課題にも直面しているものと推察される。それゆえに、これらの者においては、単に「自己責任論」の是非に止まらず、その出所である「社会的なるもの」（国家や政府、共同体）に対する批判的検討も行われる可能性が高い。また、こうした傾向は、既に「危機」を経験し、そうした課題に直面した経験をもつ同一性達成地位の者においても見出されるものと思われる。

これに対し、同一性拡散地位にある者は、そもそも「自己責任論」のような特定のイデオロギーに対する興味や関心が低いことも予想される。ただし、それが自己責任論に対する態度とどのように関連するかについては、今のところ、はっきりした仮説を有していない。

以上のような観点に基づき、本研究では、まず、被験者のアイデンティティ・

ステイタスを測定・分類した上で、自己責任論への態度やそれを支える「個人」や「社会」に対する認識がステイタス毎にどのように異なるのかについて分析を行う。なお、アイデンティティ・ステイタスの測定に際しては、面接を用いた Marcia 法の短所（面接者と被面接者とのラポールの影響を受けやすい、多数のデータの収集が困難である等）を補うべく考案された加藤（1983）の「同一性地位判定尺度」（詳しくは後述）を用いた。

方 法

被験者 本学学生186名（男性31名，女性155名）。平均年齢22.9歳。

調査時期 2004年8月上旬～9月下旬。講義時間の一部を使用し，調査を実施した。

調査内容 調査内容は，田村（2004）と同一である。以下の記述に当たっては，本研究の目的と関連が深い「アイデンティティ・ステイタス判定尺度」の説明を中心に行い，その他の調査内容については，差し障りのない範囲で記述を簡略化した。

1. アイデンティティ・ステイタス判定尺度 加藤（1983）の「同一性地位判定尺度」を用いた。先述のように，Marcia（1966）は，アイデンティティ・ステイタスの判定に際して，「危機」の有無と「自己投入」の有無という2つの変数を提唱したが，加藤（1983）は，こうした考えを踏襲しつつ，一方で，「危機」に関して，過去の危機（かつて，いくつかの選択肢について真剣に悩み迷った経験がある）と現在の危機（明確な自己投入の対象を求めて現在危機の最中にいる）とを区別し，①現在の自己投入の水準，②過去の危機の水準，③現在の危機（将来の自己投入の希求）の水準，の3変数を設定した。①に関する項目は，「私は，自分がどんな人間で何を望みおこなおうとしているのかを知っている」「私には，特に打ち込むものはない」（逆転項目）などであり，②に関しては，「私は，自分がどんな人間なのか，何

をしたのかということ、かつて真剣に迷い考えたことがある」など、③に関しては、「私は、一生けんめいにうちこめるものを積極的に探し求めている」などである。これらの項目に対し、「全くその通りだ」(6点)～「全然そうではない」(1点)の6段階で回答を求めた。そして、加藤(1983)の採点方法に従い、被験者をTable 1のような6つのステータスに分類した。

特徴的なのは、加藤(1983)では、Marcia(1966)の提唱した4つのアイデンティティ・ステータスに加え、これらのステータスの中間地位として、同一性達成—早期完了中間地位(以下、A-F 中間地位)と同一性拡散—積極的モラトリアム中間地位(以下、D-M 中間地位)が設定されていることである。大学1～4年生約300名を対象にした加藤(1983)の調査では、D-M 中間地位が全体の約半数を占めていることから、日本の大学生においては、この群がいわゆる(日本語の)「モラトリアム」に相当するとされる。

なお、本尺度の妥当性については、加藤(1983, 1986)において、基準関連妥当性や併存的妥当性に関して肯定的な結果が得られている。

2. 自己責任論への態度に関する質問項目 まず、2004年4月の「イラク人質事件」に関する概要を記述し、その後、(1)～(3)の質問を行った。

(1) イラク人質事件に対する熟知度 イラク人質事件をどの程度知っているか、「よく知っている」(6点)～「まったく知らない」(1点)の6段階で評定を求めた。

(2) 政府の対応への評価

①自衛隊対応に対する評価 「自衛隊撤退はあり得ない」とした日本政府の対応について、「支持する」(4点)～「支持しない」(1点)の4段階で評定を求めた(以下、「自衛隊対応得点」)。

②救出活動に対する評価 3人の人質の「救出活動」に関して、日本政府は、どの程度尽力したと思うか、「良くやったと思う」(6点)～「十分とは言えない」(1点)の6段階で評定を求めた(以下、「政府

評価得点)。

(3) 自己責任論に対する態度

①知識の有無 「自己責任論」を知っているか否かについて、「聞いたことがある」「聞いたことがない」の二者択一で回答を求めた。そして、「聞いたことがある」と回答した者のみ、以下の②～④の質問に答えてもらった。

②自己責任論の内容記述 被験者が知っている「自己責任論」の内容について確認するため、その内容を具体的に記述してもらった。なお、調査後に分析した結果、内容が著しく不適當であるものは見出されなかった。

③自己責任論に対する態度 自己責任論に対する態度に関して、「共感度」と「賛否度」の2つの側面について評定を求めた。「共感度」については、3人の人質の自己責任を問う声についてどう思ったか、「そのように考える人の気持ちも『よく分かる』と思った」(6点)～「そのように考える人の気持ちは『まったく分からない』と思った」(1点)の6段階で評定してもらった。また、自己責任論に対する「賛否度」については、「そのような考えに、『賛成である』」(6点)～「そのような考えには、『反対である』」(1点)の6段階で評定を求めた。なお、調査の結果、共感度と賛否度の相関係数は.839であり、強い相関が見出されたので、2つの得点の合計を算出し、自己責任論への「支持度」を表す「自己責任論支持得点」とした。

④自己責任論への態度に関する理由記述 上記の質問③で、なぜ、そのような回答を行った(態度を表明した)のか、その理由について、できるだけ詳しく記述してもらった。

⑤イラク人質事件に対する感想 最後に、被験者全員を対象に、「イラク人質事件」について、考えたことや思ったことを自由に記述してもらった。

なお、上記以外に、国民意識尺度（田村（2004）で分析済）や親の養育態度測定尺度も実施したが、これらの結果は本研究の検討対象とはしない。

以上のような調査内容を一冊の冊子にまとめ、配布した。

結果と考察

1. アイデンティティ・ステイタス別の人数分布

アイデンティティ・ステイタス判定尺度に欠損値のあった者13名を除き、173名（男性26名、女性147名）を分析の対象とした。アイデンティティ・ステイタス毎の被験者数、及び男女の内訳は、Table 1 に示す通りである。

全被験者数に占める早期完了地位（3人）、及び、同一性拡散地位（9人）の割合は、それぞれ約1.6%、及び、4.8%と非常に小さい。これに対して、D-M中間地位は最も多く、全体の過半数（53.8%）を占めている。こうした傾向は、加藤（1983）と同様のものではあった。

Table 1 アイデンティティ・ステイタス別の人数

各ステイタスの名称	操作的定義	人数（男：女）
同一性達成	過去に高い水準の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っている者	20（6：14）
同一性達成－早期完了中間（A-F中間）	中程度の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っている者	26（8：18）
積極的モラトリアム	現在は高い水準の自己投入は行っていないが、将来の自己投入を強く求めている者	22（0：22）
同一性拡散－積極的モラトリアム（D-M中間）	現在の自己投入が中程度以下の者であり、その水準が同一性拡散地位ほどに低くはないが将来の自己投入の希求の水準が積極的モラトリアム地位ほどには高くない者	93（11：82）
早期完了	過去に低い水準の危機しか経験せず、現在高い水準の自己投入を行っている者	3（0：3）
同一性拡散	現在低い水準の自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も弱い者	9（1：8）
被験者数合計		173（26：147）

2. 自己責任論への態度に関するアイデンティティ・ステイタス別の分析

まず、イラク人質事件に関する熟知度について、アイデンティティ・ステイタス間で差があるか否かについて検討するため、ステイタス毎に熟知度の平均値を算出し、それらについて一要因分散分析を行った。その結果、アイデンティティ・ステイタスの主効果は得られず ($F(5,167)=.62$, n.s.), ステイタス間で熟知度には差がないことが確認された。

(1) 政府の対応への評価、及び、自己責任論への支持度について

次に、自己責任論への支持度、及び、それと関連の深い(田村, 2004)政府の対応への評価に関して、ステイタス間でどのような違いがあるのかについて検討するため、ステイタス毎に、自己責任論支持得点、及び、自衛隊対応得点と政府評価得点の平均値を算出し、それらについて一要因分散分析を行った。なお、自己責任論支持得点の分析に当たっては、173名の被験者のうち、自己責任論を「聞いたことがない」と回答した28名の被験者を除き、145名を分析の対象とした。また、早期完了地位に関する結果については、被験者数が3名と少ないため、その信頼性に疑問が残る点も付記しておきたい。

分散分析の結果、主効果が得られたのは、自己責任論支持得点 ($F(5,139)=2.58$, $p<.05$) のみであった (Table 2)。Tukey 法による多重比較の結果、早期完了地位の方が、同一性達成地位やA-F中間地位、及び、

Table 2 アイデンティティ・ステイタス別の自己責任論支持得点の平均値

アイデンティティ・ステイタス	自己責任論支持得点 (SD)	
同一性達成地位	5.94 ^{a(注)}	(2.86)
A-F中間地位	6.63 ^a	(3.48)
積極的モラトリアム地位	7.19 ^a	(3.43)
D-M中間地位	7.87 ^{a,b}	(3.03)
同一性拡散地位	8.71 ^{a,b}	(2.13)
早期完了地位	11.33 ^b	(1.15)

注) 各アルファベットは多重比較の結果を示し、アルファベットが同一のものは、同一のグループに属することを意味する (有意水準0.5%)。

積極的モラトリアム地位よりも、自己責任論支持得点が有意に高かった。

他のステイタスと比べ、権威主義傾向が強いとされる早期完了地位の者において、自己責任論がより強く支持されていたのは、先述のように、今回の自己責任論が、「政府の命令を無視した人質（＝悪）」対「それを救う政府（＝善）」という構図を作り出すことに成功しており、政府という国家権力（権威）を後押しするかたちで展開されていたからではないだろうか。また、自己責任論が、「政府高官」や「与党政治家」といった「時の権力者」たちの発言を引用しつつ展開されていた（e.g., 産経新聞4月14日付朝刊）ことも、このような結果が得られたことと無縁ではあるまい。加えて、自己責任論が、購読者数を誇る「読売」、「産経」といった保守系新聞や、テレビ放送各局の報道番組、ワイドショー番組等を通じて繰り返し取り上げられたこともこうした結果と関連しているかもしれない。なぜなら、これら巨大なマス・メディアを通じて、自己責任論は「コンセンサス」（世論の主流）という名の「社会的リアリティ」を付与されたと考えられるが、そのこと自体、社会通念や慣習に同調的な（Marcia, 1966）早期完了地位の者が、自己責任論を支持する理由になりうると思われるからである。

なお、同一性達成や積極的モラトリアム地位の者などにおいて、自己責任論支持得点が相対的に低かったことは、後の理由分析で見ると、自己責任論の出所である「政府」やそれを容認する「共同体」といった「社会的なもの」に対する批判がより多く見出されたこととも関連していると思われる。

(2) 自己責任論に対する支持、不支持別の度数分布

各ステイタス毎に自己責任論に対する支持、不支持別の人数を算出した。この際、自己責任論支持得点（得点範囲は2-12）が8点以上の者を「支持群」、6点以下の者を「不支持群」に分類した。また参考までに、得点が7点の者は「不鮮明群」とし、その人数を算出した。結果をTable 3に示す。

同一性達成を除く他のステイタスにおいては、すべて、不支持群よりも支持群の方の人数が多くなっている。特に、早期完了地位においては、3名の

Table 3 アイデンティティ・ステイタス毎の自己責任論への支持, 不支持別人数

自己責任論 への態度	同一性 達成	A-F中間	積極的 モラトリアム	D-M中間	早期完了	同一性 拡散	合計
支持	4	10	12	44	3	4	77
不支持	10	7	9	23	0	1	50
不鮮明	3	2	0	11	0	2	18

被験者全員が支持群である。また、D-M中間地位については、統計的にも有意な差 ($\chi^2=6.58, p=.01$) が得られた (他のステイタスについては、統計的な有意差には至らなかった)。全体的な傾向として、アイデンティティ達成レベルが低いとされる (Marcia, 1966) 同一性拡散や早期完了地位などから、達成レベルが高いとされる同一性達成や積極的モラトリアム地位に向けて、不支持群の比率が上昇しているのが見て取れる。

以下では、こうした自己責任論に対する態度の違いが、具体的にどのような考え方を背景としているのかについて、被験者自身の理由記述などをもとに分析を行う。なお今回は、代表的な4つのアイデンティティ・ステイタス (同一性達成, 積極的モラトリアム, 早期完了, 同一性拡散), 及び被験者数の最も多かったD-M中間地位に絞って、それらの特徴を描出する。

(3) 自己責任論への態度に関する理由分析

自己責任論への態度に関する理由記述⁵⁾について、支持群, 不支持群別, 及び、アイデンティティ・ステイタス別に、その内容を複数のカテゴリーに分類した。結果をTable 4 ~ Table 5に示す。以下では、ステイタス間の違いが良く現れていると思われるところを中心に考察を行った。

まず、気付くのは、自己責任論支持群 (Table 4) において、積極的モラトリアム地位 (12人中5人) やD-M中間地位 (44人中24人) の者に、「“周囲の人々” や “国家や政府” に迷惑をかけたので、その責任を取るべき」とする考え方や「(国家を代表する) 政府の勧告を無視した者は助ける必要がない」といった考え方が多く見出されることである。ここでは、個人の行動の善し悪しの判断基準は、何よりもまず、周囲の具体的他者からなる「地域

Table 4 自己責任論支持群におけるアイデンティティ・ステイタス別の理由分析^{注)}

分類カテゴリー	同一性達成 (N=4)	積極的モトリアム (N=12)	D-M中間 (N=44)	早期完了 (N=3)	同一性拡散 (N=4)
<u>周囲の人々に「迷惑」をかけた責任</u>		2	7		
<u>国家や政府に「迷惑」をかけた責任</u> ・国家や政府に迷惑をかけた責任を取るべき ・政府勧告を無視した者を助ける必要はない	1	3	17	2	1
<u>危険地域に出かけた責任</u> ・危険地域に行くのだから全て自己責任	3	7	17	1	2
<u>人質の行動に対する賞賛や共感</u>	1	4	12		1
<u>イラク人質事件の背景分析</u> ・そもそもの原因は「自衛隊派遣」	3	5	3		
<u>日本という国／社会に対する批判</u>		2	2		
<u>政府のやり方に対する不満</u> ・人質事件に対する政府対応への不満	1	1	2		
<u>人質や家族への感情的反発</u>			4		1
<u>その他</u>		1	9		
記述総数	9	25	73	3	5

注) 表中の数字は、記述数 (= 当該記述を行った被験者人数) を示す。また、一人の被験者の記述内容が複数の分類カテゴリーにカウントされることもあるため、記述総数と被験者総数とは必ずしも一致しない。

社会」や、より大きな社会集団である「国家」などに対して、「不利益を及ぼしていないかどうか」であると考えられている。そして、これら自己責任論を支持する者たちにおいては、「地域社会」や「国」といった社会/共同体の存在が、自分に身近なものとして強く意識され、なおかつ、愛着を向けるべき「親愛なる対象」として位置付けられている。このことは、「迷惑」という言葉の多用に、端的に見て取れる。というのも、そもそも第三者的な立場にいて、直接的な迷惑を被っているわけではない者たちが、こうした当事者的な心情を表現する言葉を用いるのは、「迷惑」を被った当の「地域社会」や「国」に成り代わって、それらとの情緒的な連帯意識の中で、それらの立場/価値観を代弁しようとしていると考えられるからである。注目すべきな

Table 5 自己責任論不支持群におけるアイデンティティ・ステイタス別の理由分析^{注)}

分類カテゴリー	同一性達成 (N=10)	積極的モラトリアム (N=9)	D-M中間 (N=23)	同一性拡散 (N=1)
<u>人質たちの活動に対する賞賛</u> ・世界平和に貢献している ・人道支援は讃えるべき行動	6	5	15	1
<u>国民を守るべき政府の「責任」を追及</u> ・「国民を守る」ことは政府の責任（義務） ・政府関係者による自己責任発言への怒り ・自衛隊撤退を拒否した政府対応への批判	3	5	6	1
<u>第三者が自己責任論を叫ぶことへの反発</u> ・何もしていない人々に「自己責任論」を唱える権利はない	1	1	2	
<u>イラク人質事件の背景分析</u> ・そもそもの原因は「自衛隊派遣」	3	4	3	1
<u>日本という国／社会に対する批判</u>	3	1	1	
<u>自己責任論に対する感情的反発</u>	1		1	
<u>自己責任論への共感（人質の行動の批判）</u>	2	1	3	
<u>その他</u>			3	
記述総数	19	17	34	3

注) 表中の数字は、記述数 (= 当該記述を行った被験者人数) を示す。また、一人の被験者の記述内容が複数の分類カテゴリーにカウントされることもあるため、記述総数と被験者総数とは必ずしも一致しない。

のは、「国家や政府」の立場が代弁される場合、そこには、人質たちを断罪する厳しい表現が盛り込まれていることも少なくなかったことである。

“避難勧告が出ているにも関わらず、自らイラクに行った。だから、3人が捕まっても政府の責任ではない。自己責任である。その3人のためだけに、イラクで奉仕を頑張っている自衛隊が撤退する必要はない。私の中での「自己責任論」は、「自分のケツは自分で拭け」と同じである。今回の事件は、とても腹立たしかった。3人の自己中心的な行動で日本中を巻き込んだ大騒動になった。……

(略)……私から言わせると、目立ちたがり屋、野次馬としか思えなかった。”

“一般市民よりはるかに情報をもっている政府の勧告を無視して、自分の意志で決定し行った行動の責任を、政府が取らないのは当然だと思う。そういう決意でイラクに行っておいて助けを求めるなんて勝手だ。勝手した人すべてにそんなことをしては政府もキリがないのはよく分かることだ。……(略)……政府の勧告を聞かず、このような事態を起こした3人は国や国民にもっと謝罪すべきだ。”

こうした記述は、特にD-M中間地位に多く見出された。そこには、国家(政府)の価値観に共感、共鳴すると同時に、それと対立するような価値観(人質たちが取った行動)に対しては、きわめて不寛容で、排他的な態度を見出すことができる。Erikson(1982/1968)は、「社会」に承認/是認され、“価値ある「生活様式」に従って生きたいと願っている青年に、最もはっきりと話しかけるものは、イデオロギー的な社会勢力なのである”(p.169)とし、特定の「イデオロギー的な社会勢力」に対して、時として、全面的な、“信じて疑うことのないような^{コミットメント}帰依”(p.167)をしてしまう青年たちの危うさ(それは「全体主義」へも繋がりをうる)を繰り返し指摘しているが、国家的価値観を信奉しているかのような先の記述例は、このようなEriksonの指摘を思い起こさせるものでもある。

ところで、積極的モラトリアム地位やD-M中間地位においては、こうした記述が見出される一方で、自己責任論の趣旨とは対立するような「人質の行動に対する賞賛や共感」も少なからず見出された。興味深いのは、同じ一人の被験者のなかに、彼らの行動を「迷惑」と非難する記述と、「素晴らしい」と賞賛する記述とが、同時に存在していたことである。前者の記述は、「社会/共同体」の利益を最優先すべきとする「社会」の論理に基づいており、一方、後者の記述は、自分自身の意志に基づいて行動する「自立した個人」

の論理に基づいている。

“個人が起こした行動が国家全体に与える影響について考えた場合、その個人があまりにも身勝手だと感じた時には、私も同じように自己責任を問うと思う。(一方で) 一度、あのような目にあった3人が、記者会見等で、またイラクに行くことを望んでいるのを聞いたときには、驚いたのと同時に、その使命感に感心しました。”

“イラクの情勢を見て、何か自分にできることはないかと乗り込んで行って支援活動をしたと思った、というのは、素晴らしいことだと思うけれど、捕まったことによって、あらゆる人々に迷惑をかけ、日本の出方まで左右させることになったのだから、やはり3人の行動は短慮であったと思う。”

人質に対するこうしたアンビバレントな評価には、自分が所属すべき「社会」の論理と、そこに依拠しつつ自立した「個人」の論理をどのように「調和」させ、重ね合わせていくかという問い——それは、青年期の発達課題に他ならない——の答えを模索し続けている青年の姿が見て取れる。

このようなアンビバレントな記述は、同一性拡散地位の者においても見出されたが、一方で、早期完了地位の者には、まったく見出されなかった (Table 4)。早期完了地位の者においては、専ら、「社会」の論理のもとで(「社会」の支持を受けた) 自己責任論が支持されており(以下の例を参照)、そこには、「社会」と「自立した個人」との間の葛藤はほとんど感じられなかった。

“一国として決定したことであるなら、それに従うのが国民の義務であると考え。理由は何であれ、自己中心的な行動をすると、あらゆる方面にご迷惑をおかけすることになる。日本国民でなくなってから、イラクに行けばいい。”

ところで、同一性達成地位や積極的モラトリアム地位においては、自己責任論への支持、不支持を問わず、今回のイラク人質事件の「背景分析」を行っている記述もかなり高い割合で見出された（Table 4, Table 5）。そのほとんどが、今回の事件の原因を「自衛隊派遣を行った政府にある」とする内容である。こうした観点からすれば、イラク人質事件の原因を作った当の政府が、「自己責任論」によって人質たちの「責任」を糾弾するのは、責任転嫁であり、政府の施策（自衛隊派遣）の「とぼっちり」を受けたのは人質たちであって、彼らは責められるべき対象ではないということになる。

“確かに危険なイラクに行くとは決断したのは本人であるが、彼らは誰かがしなければいけないことを勇気を持ってしてくれたのだと思う。それを人質になったのは自分の責任というのはおかしい。人質事件の大きな原因は戦争を支持した政府だと思うし、責める対象がすり替わっていると思った。”

ここにも見るように、「自己責任論」に対する是非は、それを引き起こした事件の背景に目を転じることにより、人質たち「個人の落ち度」をめぐる問題から、「自己責任論」の正当性そのものをめぐる問題へと変貌を遂げることになる。そしてこれは、自己責任論を正当/妥当なものとして容認する「社会/共同体」に対して、批判的な目を向けることにも繋がっていく。

“私は政府に責任があると思う。政府が自衛隊をイラクに派遣しなければ3人は拘束されることなどなかったのでは。日本は民主主義国家であるのに、「自己責任論」という政府にとって都合の良い言葉で言いくるめてしまうことはおかしい。またそれにのせられたマスコミや国民たちも民主主義について考え直す必要があると思う。”

“国内で巻起こったバッシング等には、この国独特の集団主義に対する固執や、自国のことしか考えることが出来ない愛国主義、ナショナリズムを体感して、この国がこれからどういう方向へ向かうのかと不安にならざるを得なかった。”

こうした「人質事件の背景分析」や「日本という国/社会に対する批判」が同一性達成地位や積極的モラトリアム地位の者において多く見出されるのは、彼らが現在（あるいは既に）「危機」を経験しており、そこで直面する発達課題——自らが着床すべき「社会」を再検討するという課題が、否応なく、彼らにこうした思考作業を要請するものになっているためとも考えられる。このことは、上のような記述が、不支持群のみならず、支持群でも見出される（この場合、論理は一貫していないが）ことから推察されるだろう。

以上、まとめれば、次のようになる。まず、早期完了地位の者においては、自己責任論が強く支持されていたが、これは、彼らが「危機」を経験せず、したがって、「社会/共同体」に是認されているもの（＝自己責任論）をそのまま「価値あるもの」として受け入れ、それらと（自立した）「個人」との間の違和感をほとんど感じていないことによるものと考えられる。

これに対して、積極的モラトリアム地位やそれに準じるD-M中間地位の者においては、「社会」に対する意識がより尖鋭化され、そのなかで、「社会」が提供する価値観と「自立した個人」との位置づけをめぐる葛藤し、一貫した「答え」を未だ導き出せていない様子も伺われた。ただし、特に、D-M中間地位の者を中心として、社会/国家的な価値観と同一化しようとするような態度も少なからず見出された。

また、同一性達成地位の者においては、イラク人質事件の背景を分析することで、「自己責任論」そのものの正当性を疑うような分析も多く見出された。こうした分析態度は、積極的モラトリアム地位にも同様に見出されたが、これは、「危機」を経験し、自らが着床すべき「社会/社会的なるもの」を批判的に検討するという発達課題に直面するなかで、必然的に要請されるような思考作業の一つであるとも思われた。

なお、同一性拡散地位の者に関しては、被験者数が少なかったこともあり、他のステイタスとの違いがはっきりとは分からなかった。ただ、自己責任論支持得点が比較的高かったことから、社会の主流であるような観念/イデオ

ロギーに同一化しやすいということも考えられる。こうした可能性については、今後の検討を待たねばならないだろう。

おわりに

近年、日本の若者を中心に見出される「ナショナリズム的なもの」に対する関心が高まっている。とくに最近では、身近な出来事（サッカーのワールドカップやシドニー・オリンピックなど）を取り上げながら、それらにおいて「ナショナリズム的なもの」がどのように体现されているのかを解き明かそうとする研究が見出される（e.g., 阿部, 2001; 香山2002）。「自己責任論」を「ナショナリズム的なもの」の一つと見れば、本研究もこれらの研究と軌を一にするものと言えるが、一方で、これらとの違いは、こうした社会的現象を個人の発達の過程（アイデンティティ）との相互作用のなかで分析しようと試みた点である。被験者の記述にもあるように、「自己責任論」が現代社会の一つの「危機」を予感させ、“不安”を喚起するものであるとすれば、そうした「不安」が予期された現代において、アイデンティティの探求が今後どのような方向に向かっていくのか、継続的な検討が必要とされるだろう。

註

- 1) 「感覚 (a sense of identity)」という言葉の重要性は、「アイデンティティ」という概念が、何よりもまず、それを生きる当人が内側から実感／経験しているがままの「生きた感覚」を言い当てようとしている点にある。
- 2) ここで、「アイデンティティは、社会から受け取る支持に依存している」ということは、一方では、「個人」が「社会」に対して妥協し、社会の中に埋没してしまうという可能性／危険性をも含んでいる。しかし、では、「社会」との関係を全く断ち切ってしまうと、真の「個人」が実現されるのかといえば、決してそうではない。Erikson が言わんとしているのは、人が「自立した個人」であるためにも、他者や社会といった「社会的なるもの」を必要とするということである（この点に関する検討は、西平（1993）を参照）。
- 3) それは、具体的には、“心理社会的な安寧感として体験される……それに付随する最も明瞭な感覚としては、肉体的にくつろいだ感じとか、「自分がどこに向かっ

- て進んでいるかがよく分かっている」意識とか、自分は重要な人々から認めてもらえるだろうという内的な確信” (Erikson, 1982/1968, p.225) として経験される。
- 4) このステイタスは、そのまま「モラトリアム」と表記されることも多いが、日本語の「モラトリアム」という言葉では、このステイタスの特徴である「積極的で前向きな努力」の要素を必ずしも掬いきれない。したがって、本研究においては、加藤 (1983) に倣って、「積極的モラトリアム」という言葉を充てた。
- 5) この分析に際して、本研究では、調査冊子の最終ページに記された「イラク人質事件に関する感想」も分析対象に含めた (前稿では含まれていない)。なぜなら、ここに、イラク人質事件の背景分析や政府、日本社会への批判、人質の行動に対する感情的反発など、自己責任論に関連する重要な諸要素が見出されることが多かったからである。

引用文献

- 阿部 潔 2001 彷徨えるナショナリズムーオリエンタリズム／ジャパン／グローバル
リゼーション 世界思想社
- Erikson, E. H. 岩瀬庸理 (訳) アイデンティティー青年と危機 1982 金沢文庫
(Erikson, E.H. 1968 *Identity: Youth and crisis*. W.W.Nortn &
Company.)
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31,
20-30.
- 加藤 厚 1986 同一性測定における2アプローチの比較検討 心理学研究, 56,
355-360.
- 香山リカ 2002 ぶちナショナリズム症候群ー若者たちのニッポン主義 中公新書
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status.
Journal of Personality and Social Psychology, 3, 551-558.
- Marcia, J. E. 1967 Ego-identity status: Relationship to change in
self-esteem, general maladjustment, and authoritarianism. *Journal
of Personality*, 35, 119-133.
- Marcia, J. E., & Friedman, M. L. 1970 Ego identity status in college
women. *Journal of Personality*, 38, 249-263.
- 西平 直 1993 エリクソンの人間学 東京大学出版会
- 田村美恵 2004 イラク人質事件における「自己責任論」への態度に影響を及ぼす心
理的要因の検討(1)ー国民意識のあり方、及び、自己責任論への賛否に関
する理由記述に注目してー 神戸外大論叢, 55, (7), 35-54.